



Title	和漢朗詠集の排列について：七夕項目を中心に
Author(s)	
Citation	令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2021
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80628
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和2年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	ももい はな 百井 花	学部 学科	文学部人文学科	学年	2 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	滝川 幸司	所属	文学研究科		
研究課題名	和漢朗詠集の排列について—七夕項目を中心に—				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				
本研究は『和漢朗詠集』延いては作者独自の排列意識を浮かび上がらせることを企図している。本研究達成のために、以下に掲げるようなステップで研究を行うことを予定している。 ①調査 『和漢朗詠集』と『古今和歌集』を始めとする歌集（『千載佳句』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』など）を排列の観点から比較する。藤原公任撰の他の歌集（『金玉和歌集』『三十六人撰』など）との比較も行う。公任による歌論書（『新撰髓脳』『和歌九品』など）から公任の和歌意識をも探る。必要に応じて中古以前の文学作品は広く取り扱う。これに加えて、たとえば「七夕」のように漢籍に典拠がある場合、漢籍の調査や日本での享受のようすを辿る。また、たとえば「在原業平」のように詩歌の作者が明らかである場合、『三代実録』や『古今和歌集目録』などの資料を基にその人物について整理する。各々の詩歌が『和漢朗詠集』以前や同時期にどのように理解されていたのか、またその評価についても調べる。調査にあたり、「日本古典文学大系本文データベース」や「寒泉」などの各データベースも使用する。 ②考察 調査したデータをもとに『和漢朗詠集』の排列意識について考察する。『和漢朗詠集とその享受』『和漢朗詠集とその受容』などを参考とし、排列の役割・効果を考える。必要に応じて他の作品の排列に関する書籍や論文を読み、本考察の参考とする。 ③総括 上記①②より、『和漢朗詠集』延いては作者の排列意識の検討結果をまとめる。。 また研究期間中においても、随時、大学などでの研究会において研究報告を行うことで自身の研究の見直しを行い、向上を目指す。 以下が、その研究成果である。					

和漢朗詠集の排列について一七夕項目を中心にー

大阪大学文学部人文学科日本文学・国語学専修二年生 百井 花

ー

『和漢朗詠集』は平安時代中期に成立した藤原公任撰の詩歌集である。その成立には『古今和歌集』『千載佳句』の影響が大きいとされるが、たとえば「七夕」項目はそのどちらとも排列を異にしている。本論では『古今和歌集』『千載佳句』のみならず、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『古今和歌六帖』などの歌集を参照し、「七夕」項目を中心に『和漢朗詠集』延いては作者独自の排列意識を検討したい。

考察範囲は『和漢朗詠集』以前の漢詩・和歌とし、本文の引用は特に断りのない限り新編日本古典文学全集に拠る。

ー

七夕

- 二一二 憶得少年長乞巧 竹竿頭上願糸多 白
 二一三 二星適逢 未叙別緒依依之恨 五更将明 頻驚涼風颯颯之声 美材
 二一四 露応別涙珠空落 雲是残粧鬟未成 菅
 二一五 風従昨夜声弥怨 露及明朝涙不禁
 二一六 去衣曳浪霞応湿 行燭浸流月欲消 菅三品
 二一七 詞託微波雖且遣 心期片月欲為媒 輔昭
 二一八 天の川とほき渡りにあらねども君が舟出は年にこそ待て 人丸
 二一九 ひととせに一夜と思へど七夕のあひ見む秋の限りなきかな 貫之
 二二〇 年ごとに逢ふとはすれど七夕の寝る夜の数ぞすくなかりける 躬恒

右に引用したのは『和漢朗詠集』の「七夕」項目である。「七夕」項目を構成するにあたって他の文献の排列を参考にした可能性があるため、『和漢朗詠集』への多大な影響が知られる歌集の「七夕」歌群と比較したい。

本論は『古今和歌集』『千載佳句』『後撰和歌集』『古今和歌六帖』『拾遺和歌集』の順でそれぞれの排列を検討し、それらの特徴を適宜『和漢朗詠集』への解釈に還元する形で展開する。

①『古今和歌集』

- 一七三 秋風の吹きにし日より久方のあまのかはらにたたぬ日はなし
 一七四 久方のあまのかはらのわたしもり君わたりなばかぢかくしてよ
 一七五 天河紅葉をはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ
 一七六 こひこひてあふ夜はこよひあまの河きり立ちわたりあけずもあらなむ

寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのこども歌たてまつれとおほせられける時に、人にかはりてよめる ともりの

- 一七七 天河あさせしら浪たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

おなじ御時きさいの宮の歌合のうた 藤原おきかぜ

一七八 契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたびあふはあふかは

なぬかの日の夜よめる 凡河内みつね

一七九 年ごとにあふとはすれどたなばたのぬるよのかずぞすくなかりける

一八〇 織女にかしつる糸の打ちはへて年のをながくこひやわたらむ

題しらず そせい

一八一 こよひこむ人にはあはじたなばたのひさしきほどにまちもこそすれ

なぬかの夜のあかつきによめる 源むねゆきの朝臣

一八二 今はとてわかるる時は天河わたらぬさきにそでぞひちぬる

やうかの日よめる みぶのただみね

一八三 けふよりはいまこむ年のきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき

一七九歌は『和漢朗詠集』にも二二〇歌として同じく収められている。

『古今和歌集』の「七夕」歌群の特徴として、時間軸に沿った展開が挙げられる。もともと『古今和歌集』自体が時間軸を重んじる構成を取っているが、「七夕」項目も例に漏れず七日以前～七日の夜～八日以降という流れで展開される。加えて、上平真由美氏は和歌の主体にも排列の工夫があるとする。

【先行研究①】上平真由美「『古今集』の七夕歌」（茨城大学人文学部紀要、平成十二年）

ここまで見てきた秋歌上の十一首を、時間の推移とその歌の描く対象とによってまとめなおしてみると次のようになり、秋歌上の七夕歌は、細かな時間軸と歌の中の行為者の別とによって、細密に、物語的に配列されていることがわかる。

k	j	i	h	g	f	e	d	c	b	a	
八日以降 (未定)	翌朝(後朝)		七日の夜 (牽牛)		七日の夜 (牽牛が川を渡っている)		七日の夜 (牽牛はまだ来ていない)		立秋以降七日以前		時間の推移
織女	牽牛	詠作主体 (織上のき)	詠作主体 (天上のき)		牽牛	織女 (詠作主体)	織女		対象		

※発表者注：a～kとは一七三歌から一八三歌のこと。たとえばbは一七四歌。

この表から、「待つ」という受動的な時間には織女が主体の歌、「川を渡る」という能動的な時間には牽牛が主体の歌が配されていることがわかる。そして逢瀬の時間には、当事者の歌はなく、いずれも詠者の立場から見た二星会合が描かれている。最後の二首は牽牛によって詠まれた後朝の歌と、再びひたすら待ち続けなければならない未来を見わたした織女の歌とによって締めくくられる。永劫にわたって続く悲恋のサイクルが、実に見事に表現された配列なのである。

これらの特徴は『和漢朗詠集』にも見えるだろうか。「七夕」項目を「時間軸」「主体」という観点でまとめると、左のようになる。

二一二 不詳 男

- 二一三 明け方 二星
- 二一四 明け方 織女
- 二一五 翌朝 織女
- 二一六 翌朝 織女
- 二一七 八日以降七日以前 織女
- 二一八 八日以降七日以前 織女
- 二一九 七日の夜 二星
- 二二〇 七日の夜 二星

二二〇歌は上平氏の論では「詠作主体（天上の恋）」と分類されているが、織女と牽牛を対象に詠んだ和歌であることは明らかであるため、便宜的に「二星」と表記している。『和漢朗詠集』には採られた句のみでは「詠作主体」を判断しかねる漢詩もあり、あくまで作品の中心に据えられた存在を考察するにとどめたほうが確実だと考えたためである。

まず初めに、「時間軸」を考察したい。二一二詩は時間軸が不詳であるものの、七夕の行事を思い返す詩であり、「七夕」項目の導入として適当か。二一三詩から時系列が始まり、八日以降～七日以前～七日の夜と展開される。『古今和歌集』がそのまま時間の流れの通りに排列したのに対して、『和漢朗詠集』ではあえて八日の別れを最初に置くことで、七日の逢瀬をクライマックスとして七夕伝説をまとめ上げている。『古今和歌集』の和歌はその年の立秋以降から八日までのコンパクトな時間軸であったが、『和漢朗詠集』はその年の別れから来年の七日までを辿ることで一年を通した時間軸のふくらみや重厚さを付加している。また、七夕伝説において一番の盛り上がりが七日の逢瀬であることは明白だが、それを項目の最後に持ってきた公任からは排列の物語性をさらに盛り上げようという姿勢がみえる。

次に、主体について考えたい。『古今和歌集』は和歌の主体を織女・牽牛・二星・地上の男女とバランスよく取っていたが、『和漢朗詠集』は冒頭と二星を主体とする二一三詩・二一九・二二〇歌を除いて、間の詩歌はすべて織女を主体としている。牽牛は単体では一度も主体にされず、織女が突出しているのである。これは公任が七夕伝説を織女の物語であると捉えていた可能性を示している。

【先行研究②】松浦友久編『漢詩の事典』六一〇頁（大修館書店、平成十一年）

「七夕」伝説は日本にも伝わり、漢詩ばかりではなく、和歌の世界にも影響を与えている。しかし日本での主体は彦星であり、彦星が、天の川を渡って織り姫に逢いにゆくことになる。その後の中国の詩（またこの直接の影響下に作られた日本漢詩）においては、決まって織女が河漢（銀河）を渡るのと、正しく反対なのである。この興味深い差異については、小島憲之氏の「古今集以前一詩と歌の交流」（第一章）に詳細な研究がある。そこでは、当時の日本の婚姻形態が中国とは異なり、「妻問い」を基本にしていたことが、重要な原因として考えられている。

先行研究によると中国漢詩では主体は織女に限定され、七夕伝説は織女主体の物語として捉えられている。しかし日本では「妻問い」という婚姻文化の影響もあり、天の川を渡るという大きな役目は牽牛へと譲られ、織女は「待つ女」としていわば一歩引く存在となった（もちろん「待つ女」になったところで、男を待つ女が数多い「妻問い」文化においては織女の実感が薄まることはなかっただろう）。【先行研究①】で指摘された「待つ」という受動的な時間には織女が主体の

歌、「川を渡る」という能動的な時間には牽牛が主体の歌が配されている」ことはまさしくこのためである。『古今和歌集』は実に日本的な理解のもと「七夕」歌群を構成したのである。

『和漢朗詠集』では二一六詩で織女が天の川を渡る様子が描かれる。二一六詩は日本漢詩であるが、織女を主体とする中国漢詩の影響を受けた作品であろう。対して二一八歌では日本の七夕伝説に基づいて、牽牛を待つ織女の姿が詠まれている。「七夕」項目の中に日本の七夕と中国の七夕の両方が組み込まれているのである。『和漢朗詠集』が日本と中国で異なる素材や読み方の違う素材を一つの項目にまとめていることは田中幹子氏（「公任の『和漢朗詠集』の編纂方法私見」）などに詳しいが、日中で形態の異なる七夕伝説の調和を試みた「七夕」項目においても同様のことがいえる。

一方で『和漢朗詠集』はその構成で日本の価値観に重きを置くことが通説である。

【先行研究③】田中幹子「公任の『和漢朗詠集』の編纂方法私見」（『京都語文』八号、平成十三年）

中国では詠まれることがないが、和歌の世界では欠かせない春の「山吹（款冬）」、秋の「萩」の等の歌材は、中国漢詩の用例を掲げることができなくともあえて項目を設けていること等がその現れである。また「郭公」の項目では、郭公（杜鵑）中国漢詩は数多くありながら、中国では死を暗示させる内容の詩が多いため公任はあえて採録していない。公任が選んだ「郭公」項目の中国漢詩句は『千載佳句』で「早秋」項目に採られていた「一声山鳥曙雲外」（和漢朗詠・郭公・一八二）であった。公任はこの詩句の内容がほととぎす歌の詠みぶりと合うと判断したのである。これも『和漢朗詠集』が和歌の価値観に重きを置いていることを示している。また、日本と中国で季の違う、郭公（中国では春）、螢、輝（共に中国では秋）も日本の季節感に合わせた分類をしている。

諸氏が指摘するように『和漢朗詠集』は確かに日本を軸に据えた詞華集であるが、「七夕」項目の構成にあたってその根底には織女を主体とする中国の七夕伝説享受のあり様を覗ける。織女が河を渡る／渡らない、待つ／待たないに関わりなく、そもそも一貫して織女に主眼の置かれている点が中国の価値観を摂取した証である。日中の価値観の相違において、このように中国の価値観を優先する「七夕」項目は『和漢朗詠集』編纂意識の検討のためにも今後刮目すべき例ではあるまいか。

次に、『千載佳句』『後撰和歌集』『古今和歌六帖』『拾遺和歌集』について考察したい。

②『千載佳句』（金子彦二郎「平安時代文学と白氏文集.第一巻 句題和歌・千載佳句研究篇」、講談社、昭和十八年）

七夕

二四七 憶得少年長乞巧 竹竿頭上願絲多 七夕 白

二四八 百賽鏡輪金翡翠 五雲絲網玉蜘蛛 七夕 陳素風

『千載佳句』は七夕に二句しか取っておらず、『和漢朗詠集』との差異は分かりやすい。二四七詩は『和漢朗詠集』では二一二詩として見える。二一二詩は「七夕」項目の冒頭に設置されているが、これは『千載佳句』の影響か。

『千載佳句』の性格として、部立てや項目などの構成が中国的であることが挙げられる。たとえば奥村郁子氏は『千載佳句』を「類書的」と特徴付ける。

【先行研究④】奥村郁子「『和漢朗詠集』の撰集意識について―「蛩」をめぐる―」（金沢大学教育学部附属高等学校「高校教育研究」、平成三年）

「千載佳句」の部類項目について金子彦二郎氏は、当時伝来していたであろう、唐人による佳句選の体裁になったものではあるまいかと推論しておられる。残念ながらそれらの書物は実物が残っておらず、推測の域を出ないのであるが、「千載佳句」の項目が中国的なものであったことは、「初学記」などの類書との類似によって明らかであると思われる。（中略）「千載佳句」が類書的な配列をとり類書的な利用方法も行われたであろうことについては、前に述べた。ところが「朗詠集」においては、「千載佳句」が非常に深い関係が認められるにもかかわらず、「千載佳句」の基本的な編集方法であるこの類書的な配列を、全面的には踏襲していないのである。それでは、「朗詠集」の編纂の基本方針は何に拠っているのでしょうか。それは、諸注釈者がすでに指摘するように、また、表からも明らかに読み取れるように、和歌集的なものであると考えられる。

奥村氏が指摘するように、『和漢朗詠集』は『千載佳句』から大きな影響を受けながらも排列に至ってはその性格を直には引き継いでいないと推察できる。「七夕」項目についても『千載佳句』から冒頭の詩は採ったものの、排列全体への影響は乏しいと考える。

「七夕」項目の排列について考えるに当たって、注目すべきは和歌集か。

③『後撰和歌集』（片桐洋一『新日本古典文学大系第六巻 後撰和歌集』、岩波書店、平成二年）

源昇朝臣時時まかりかよひける時に、文月の四五日許、七日の日の料に装束調じてと言ひつかはして侍ければ 閑院

二二五 あふことは織女に等しくて裁ち縫ふわざはあへずぞありけ

題しらず よみびとも

二二六 天河渡らむそらもおもほえず絶えぬ別と思ふものから

文月の七日に、夕方詣で来むと言ひて侍けるに、雨降り侍りければ詣で来で 源中正

二二七 雨ふりて水まさりけり天河こよひはよそに恋ひむとや見し

返し よみ人しらず

二二八 水まさり浅き瀬しらずなりぬとも天の門渡る舟もなしやは

七日、女のもとにつかはしける 藤原兼三

二二九 織女もあふ夜ありけり天河この渡にはわたる瀬もなし

かれにける男の、七日の夜詣で来たりければ、女のよみて侍りける よみ人しらず

二三〇 ひこぼしのまれにあふ夜の常夏は打ちはらへども露けかりけり

七日、人のもとより返事に今宵逢はんと言ひおこせて侍ければ

二三一 こひこひてあはむと思夕暮はたなばたつめもかくぞあるらし

返し

二三二 たぐひなき物とは我ぞなりぬべきたなばたつめは人目やはもる

題しらず

二三三 天の河流れて恋ひばうくもぞあるあはれと思瀬に早く見む

二三四 玉鬘絶えぬ物からあらたまの年の渡はただ一夜のみ

二三五 秋の夜の心もしるくたなばたのあへる今宵は明けずもあらなん

二三六 契剣事の葉今は返してむ年のわたりによりぬる物を

七日、越後蔵人につかはしける 藤原敦忠朝臣

二三七 逢事の今夜過ぎなば織女に劣りやし南恋はまさりて

七日 よみ人しらず

二三八 織女の天の門わたる今宵さへ遠方人のつれなかるらん
七夕をよめる

二三九 天河遠き渡はなけれども君が舟出は年にこそ待て

二四〇 天の河岩越す浪のたちあつつ秋の七日の今日をしぞ松
紀友則

二四一 今日よりは天の河原はあせな南そこひとなくただ渡りなん
よみ人しらず

二四二 天河流れて恋ふるたなばたの涙なるらし秋の白露

二四三 天の河瀬の白浪高けれどただ渡り来ぬ待つに苦しみ

二四四 秋来れば河霧渡る天河川上見つつ恋ふる日の多き

二四五 天河恋ひしき瀬にぞ渡りぬるたきつ涙に袖は濡れつつ

二四六 たなばたの年とは言はじ天河雲たちわたりいざ乱れなん
凡河内躬恒

二四七 秋の夜のあかぬ別をたなばたは経緯にこそ思ふべらなれ
七月八日の朝 兼輔朝臣

二四八 たなばたの帰朝の天河舟もかよはぬ浪も立た南
おなじ心を つらゆき

二四九 朝門あけてながめやすらんたなばたはあかぬ別の空を恋ひつつ

二三九歌は『和漢朗詠集』の二一八歌として第二・三句を「とほき渡りにあらねども」に作って出る。

『後撰和歌集』の七夕歌群は『古今和歌集』同様に時系列に沿って展開されると杉谷寿郎氏は指摘する。『古今和歌集』と同じく七日以前～七日の夜～八日以降という時間軸で排列が成されるのである。

【先行研究⑤】杉谷寿郎「後撰集秋部の排列」（『学叢』九号、昭和四一年）

歌題内の展開の例を「七夕」によってみると、「七夕」歌群は、まず $\frac{5}{22}$ 「七月の四五日許」に始まり、

七夕当日の「夕方」 $\frac{1}{22}$ 「よそに」、 $\frac{8}{22}$ 「渡る舟もなし」・ $\frac{9}{22}$ 「わたるせもなし」から、次の

「あふよ」という不審の一首 $\frac{0}{23}$ をおいて、 $\frac{1}{23}$ 「ゆふぐれ」・ $\frac{3}{23}$ 「はやく見む」・ $\frac{5}{23}$ 「あへるこよ

ひ」の明けない願い、七夕に似た逢い難き嘆き $\frac{6}{22}$ ～ $\frac{6}{22}$ から、 $\frac{0}{24}$ 「まつ」心、さらに進んで $\frac{1}{24}$

「たゞわたりなん」、 $\frac{3}{24}$ 「たゞわたりきぬ」、諸本の位置不安定な $\frac{4}{24}$ の「こふる日のおほき」、

$\frac{5}{24}$ 「渡ぬる」の逢瀬、逢うを七日ばかりと定めず逢う日の $\frac{6}{24}$ 「みだれなん」心から、逢うての後の

247 「別を一思ふ」の嘆きへ、さらに248 「七月八日」の「帰朝」、647 「あかぬ別」へと展開している。以上のように、七夕を待つ心から、渡り難き夕暮、「はやく」と望む宵、逢う直前の待つ心から逢瀬へ、逢えば七夕のはかない定めを除こうと努める、八日後朝の別へと展開していて、中には不審な箇所もままあるが、ほぼ時間の経過、段階を生って排列されてある。これは『古今集』の「七夕」が、「待つ七夕」「会う七夕」「別れる七夕」の「時間的経過を軸とし、初・中・後の三段階に組織」〈注・松田武夫氏『古今集の構造に関する研究』〉されているのと同様の組織でもって構成されており、意図されたものといえることができる。

『後撰和歌集』が時間軸において『古今和歌集』と同じ形を取るのであれば、和歌の主体についてはどうであろうか。

『後撰和歌集』の前半部分（二二五歌～二三八歌）は二二六・二三四・二三五歌の三首を除いて地上の男女を和歌の主体としている。たとえば、二二九歌を挙げよう。

七日、女のもとにつかはしける 藤原兼三
二二九 織女もあふ夜ありけり天河この渡にはわたる瀬もなし

藤原兼三が織女を引き合いにして、自分と逢ってくれない女を恨んだ和歌である。このように『後撰和歌集』の七夕歌群には織女や牽牛を主体とした和歌だけでなく、天上の恋を引き合いに自身の恋を歌う場合も多かった。天上の恋歌十四首に対して、地上の恋歌は十一首であり拮抗する比率である。これは『古今和歌集』や『和漢朗詠集』には見られない特徴といえる。後半部分（二三九歌～二四九歌）は和歌の主体はいずれも織女と牽牛が主体である。左はその内訳である。どちらが主体であるかについては、先述の小島氏の論を参考とした。

二三九	織女	二四五	牽牛
二四〇	織女	二四六	牽牛
二四一	牽牛	二四七	織女
二四二	織女	二四八	織女
二四三	牽牛	二四九	織女
二四四	織女		

織女の方がやや多いが、牽牛を主体とした歌も少なからず取られていることがわかる。

七日以前と八日以降が織女主体、七日の夜が牽牛主体の傾向にある。「待つ」局面では織女、「川を渡る」局面では牽牛というように、主体についても『古今和歌集』と同じ形を取っている。

④『古今和歌六帖』（『新編国歌大観』、角川書店、昭和五八年）

七日の夜 いせ

一三三 めづらしくあふ七夕はよそ人もかげ見まほしき物にぞ有りける

人丸

一三四 あまの河水かげ草の秋風になびくを見ればときはきぬらし

ふかやぶ

一三五 わびぬれば常はゆゆしき七夕もうらやまれぬる物にぞ有りける

人丸

一三六 あまの河とほきわたりにあらねども君がふなでは年にこそまで

一三七 くにもせにつねにあふなはたつめれどあひ見る事はただこよひなり

一三八 玉かづらたえぬものからさぬるよは年のわたりにただ一よのみ

一三九 あからひくいろたへのこのかずみれば人づまゆゑに我こひぬべし

一四〇 天河紅葉を橋にわたせばや七夕つめの秋をしもまつ

一四一 とほつまとたまくらかへてねたるよはとりのねなくにあけばあくとも

一四二 としにありて一よいもにあふひこ星も我にまさりて思ふらめやは

おきかぜ

一四三 ちぎりけん心ぞつらき七夕のとしに一たびあふはあふかは

人丸

一四四 おほぞらをかよふ我すら何故にあまのかはらをなづみてぞくる

そせい

一四五 こよひこん人にはあはじ七夕のひさしきほどにあへもこそすれ

ひとまろ

一四六 あひ見まく秋たたずともしののめの明けはてにけりふなでせんかは

一四七 わたし守舟はやわたせ一とせに二たびきます君ならなくに

みつね

一四八 年ごとにあふとはすれど七夕のぬるよの数ぞすくなかりける

いせ

一四九 あさまだき出でてひろはんけふのをに心ながさをくらべてしかな

つらゆき

一五〇 秋風によのふけゆけば天河かはべの浪のたちゐこそまで

一五一 あまの河みだえもせなん鵲の橋もわたさでただわたりせん

一五二 けふよりはあまのかはらもあせななんよどみともなくただわたりなん

つらゆき

一五三 一年に一よばかりを七夕のいつとあふとか名をばたつらん

一五四 一年に一夜とおもへど七夕のあひ見る秋のかぎりなきかな

一五五 七夕はいまやわかれん天河河霧立ちてちどりなくなり

一五六 ゆふづくよひさしからぬを天河はやく七夕こぎわたりなん

一五七 つもりぬるとしおほけれど天河君がわたれる数ぞすくなき

一五八 天河よぶかく君はわたるとも人しれずとは思はざらなん

已上貫之

とものり

一五九 天河あさせしら波たどりつつわたりはてねばあけぞしにける

一六〇 久かたのあまのかはらのわたし守君わたりなばかぢかくしてよ

みつね

一六一 なぬかびのはやくれななん久かたの天の河霧たちわたるべく

一六二 ひこぼしのつままつよひの秋風に我さへあやな人ぞこひしき

ゆげのわうゆはらの大きみ或本

一六三 ひこぼしの思ひますらんことよりも見るわれくるしよのふけゆけば

あした つらゆき

一六四 あさとあけてながめやすらん七夕はあかぬ別の空を恋ひつつ

みつね

一六五 けふよりはいまこんとしのきのふをぞいつしかとのみ待ちわたるべき

かねすけ

一六六 七夕のかへるあしたの天河舟もかよはぬ波もたたなん

一三六歌は『和漢朗詠集』二一八歌、一五四歌は二一九歌、一四八歌は二二〇歌としてみえる。

『和漢朗詠集』「七夕」項目所収の和歌がすべて収められている。「七夕」項目の和歌は『古今和歌六帖』を出典とするか。

『古今和歌六帖』では今までみてきた「時間軸に沿った展開」や「和歌の主体」に全体的な傾向はみられなかった。しかし一五四～一五八歌までの貫之歌群ののちに限定すると、その傾向を少しく捉えることができる。

一五九 七日の夜 牽牛

一六〇 七日の夜 織女

一六一 七日 牽牛

一六二 七日の夜 牽牛

一六三 七日の夜 牽牛

一六四 翌朝 織女

一六五 八日以降 織女

一六六 翌朝 織女

右のように七日の夜から翌朝にかけた時系列を捉えられる。また、「待つ」行為には一六二歌を除いて織女、「川を渡る」行為には牽牛があたっている。

【先行研究⑥】田中智子「古今和歌六帖「雑思」の配列構造—古今和歌集恋部との比較を中心に—」（『中古文学』、平成三〇年）

本稿では、『古今六帖』《雑思》において、多種多様な内容の項目が立てられていること、またそれらの項目が独自の方針に基づき配列されていることを明らかにしてきた。『古今六帖』が『古今集』から多数の歌を採録していることは既に指摘されてきたが、『古今六帖』撰者は、『古今集』を採歌源の一つとして利用しただけではなく、その配列構造にも大いに学んでいるのである。

田中氏が指摘するには、『古今和歌六帖』の排列は『古今和歌集』からの影響を十分に受けている。一五九～一六六歌における時間軸や主体の別も『古今和歌集』の影響を受けてのことか。では、何故それ以前の和歌では時間軸や主体に傾向が見られなかったのだろうか。『古今和歌六帖』の排列の特徴として、平田喜信氏は「連想」をキーワードに挙げる。

【先行研究⑦】平田喜信「作品としての古今和歌六帖」（『平安中期和歌論考』、平成五年）

次に六帖の採歌、配列においてもっとも特徴的なのは、歌詞を中心とするその接続の妙である

う。第一「歳時」部「あまのはら」の項を例にその様態をながめてみると、二五一に「あまのがは」、二五二、二五三に「あまのはら」、二五四に「あまのみそら」とまず題に密着した語を含む歌が配列され、二五五おほぞらは恋しき人のかたみかは物思ふごとに詠めらるらんで一転して「おほぞら」に恋の気分を托している。(中略)部分的ではあるが随所に「ことば」の連想による配列がくり返されている。このような観点でこの歌集を見ると、撰者は分類のための題の設定に注意を払っただけでなく、その細部の和歌の流れにも気を配ったと思われる節が多々認められるのである。

平田氏によると『古今和歌六帖』の排列の特徴として、連想による展開がある。これに照らし合わせると、たとえば一三三歌から一三四歌へは「かげ」の連想、一五一歌「あまの河」「ただわたりせん」から一五二歌「あまのかはら」「ただわたりなん」への連想など排列の展開が分かりやすい。

⑤『拾遺和歌集』（小町谷照彦『新日本古典文学大系第七巻 拾遺和歌集』、岩波書店、平成二年）

延喜御時屏風歌 みつね

一四二 ひこぼしのつままつよひの秋風に我さへあやな人ぞこひしき
つらゆき

一四三 秋風に夜のふけゆけばあまの河かはせに浪のたちみこそまで
題しらず 柿本人まろ

一四四 あまの河とほき渡にあらねども君がふなでは年にこそまで

一四五 天の河こそぞの渡のうつろへばあさせふむまに夜ぞふけにける
よみ人しらず

一四六 さ夜ふけてあまの河をぞいでて見る思ふさまなる雲や渡ると
湯原王

一四七 ひこぼしの思ひますらん事よりも見る我くるしよのふけゆけば
人まろ

一四八 年に有りてひとよいもにあふひこぼしも我にまさりて思ふらんやぞ
延喜御時月次御屏風に つらゆき

一四九 たなばたにぬぎてかしつる唐衣いとど涙に袖やぬるらん
右衛門督源清蔭家の屏風に

一五〇 ひととせにひとよとおもへどたなばたのあひ見む秋の限なきかな
左兵衛督藤原懐平家屏風に 恵慶法師

一五一 いたづらにすぐる月日をたなばたのあふよのかずと思はましかば
七夕庚申にあたりて侍りける年 もとすけ

一五二 いとどしくいもねざるらんと思ふかなけふのこよひにあへるたなばた
題しらず よみ人しらず

一五三 あひ見てもあはでもなげくたなばたはいつか心ののどけかるべき

一五四 わがいのる事はひとつぞ天の河そらにしりてもたがへざらん

一四四歌は『和漢朗詠集』二一八歌、一五〇歌は二二〇歌としてみえる。

『拾遺和歌集』を「時間軸」と「主体」の観点でまとめると左のようになる。

一四二 七日の夜 牽牛	一四九 不詳 織女
一四三 七日の夜 織女	一五〇 七日の夜 二星
一四四 七日以前 織女	一五一 不詳 織女
一四五 七日の夜 牽牛	一五二 七日の夜 織女
一四六 七日の夜 人	一五三 不詳 織女
一四七 七日の夜 牽牛	一五四 七日 人
一四八 七日の夜 男	

『拾遺和歌集』では今までにみられた時間軸はなく、「七日の夜」が中心に描かれている。また、主体については織女がやや多いものの、牽牛や地上の男女もバランスよく取られている。一四六歌では占い、一五二歌では庚申、一五四歌では七夕祈願など身近な生活に密着させた和歌は『拾遺和歌集』で初めて確認できる。

—

本論では七夕項目を中心に『和漢朗詠集』延いては作者独自の排列意識を考察した。

「七夕」伝説は日中で形態が異なるが、『和漢朗詠集』に大きな影響を与えた『古今和歌集』『後撰和歌集』などの歌集は日本の七夕伝説に則って排列を成しているのに対し、日中の異なる素材を調和させて一つの項目にまとめ上げる『和漢朗詠集』では日中両方の詩歌を取り入れながらも、詩歌の主体選択については一貫して中国の七夕伝説理解に基づいていた。

また『古今和歌集』『後撰和歌集』『古今和歌六帖』では「七夕」項目の排列が七日以前～七日の夜～八日以降という経過を辿るのに対し、『和漢朗詠集』ではまず最初に行事そのものをうたった詩句が取られ、八日の明け方から時系列が始まり、別れを惜しみ七夕を待つ詩歌はさんで、項目の最後にクライマックスとして七日の夜歌があげられた。これには『古今和歌集』などのように時系列排列にすることで物語性を付与しながらも、それだけに止まらず、さらにその物語性を盛り上げようとする意識がみえるのではないか。

—

新編日本古典文学全集『和漢朗詠集』

新編日本古典文学全集『古今和歌集』

平安時代文学と白氏文集 第一巻 句題和歌・千載佳句研究篇

新日本古典文学大系『後撰和歌集』

新日本古典文学大系『拾遺和歌集』

『新編国歌大観』（日本文学ウェブ図書館）

上平真由美「『古今集』の七夕歌」

松浦友久編『漢詩の事典』

田中幹子「公任の『和漢朗詠集』の編纂方法私見」

奥村郁子「『和漢朗詠集』の撰集意識について―「蛩」をめぐる―」

杉谷寿郎「後撰集秋部の排列」

田中智子「古今和歌六帖「雑思」の配列構造―古今和歌集恋部との比較を中心に―」

平田喜信「作品としての古今和歌六帖」

（出版社、発行年月日は資料内に記載／最終閲覧日は二〇二一年一月八日）